大赤見用水とは

熊澤　良嗣 調

丹羽（井端）団地の西から南に沿って大江川が流れている。団地の北――そこはもう浅井町であるが――には大きな変電所がある。その変電所の西に接する大江川の対岸に「宮田用水大赤見分水工」と書いた建物が立っている。ここが大赤見用水の始まりである。

昔はここから大江川の水を取り入れていた。今の大江川には悪水（排水）が流れているから直接の分水は無理で、農業用の水は大江川の堤防や河床の下に埋設された管を通って送られてきている。だからその流れを直接目にすることはできない。

このことは大赤見用水についても同じで、基本的には埋設管を通じて直接水田に配水している。ただ、これでは水量が不足する地域もあり、そういうところでは用水路にも配水して臨時に立切（たてきり）を設けて水田に引水するところもある。

大赤見用水はこの分水工から団地沿いに大江川左岸――川下に向かって――を進み、県立一宮東養護学校南を抜けて栽松寺横・若年公民館横・若年歩道橋下・大山医院東を通過し、ここで進路を南に取り、柚木颪・大赤見・浅野・馬見塚・せんい・あずら、と各地区の西境を流れる。あずらに入ると名前が縁葉川（えんばがわ）と変わり、丹陽外崎（どさき）で千間堀と合流し最後は青木川に落ち込む。（青木川は更に下って五条川に入り、五条川は新川に入る。）

さて東の千間堀と同様に、この大赤見用水も、過去の経緯を調べるための資料がほとんど見つからない。ただ大冊の宮田用水史３冊の中に一度だけ、「大赤見用水」の名前が出てくる。またこの用水史の編者でもあった森徳一郎氏が、一宮市史西成編の中で「大赤見馬見塚用水」という表題で１頁ほど書いておられる。多分これは「大赤見用水」についての

記述であると思われるので、以下に一部を引用する（意訳）。

『大赤見の灌漑用水は古くは般若井組（般若川）に属していたが、安定した水の確保が困難なため、延享五年（１７４８）役所に願い出て大江川丹羽村地内に杁を造って取水するようになった。当時新般若用水は存在していなかったので、大赤見は時之島で般若川から引水していた。大江川から水を取るようになってからも、万一の旱魃（かんばつ）を恐れ、時之島からの井道（水路）はそのまま残した

大江川からの新たな取入口付近の施設物は以下の内容である。

一、　元杁一ヶ所　　丹羽村字鵜の元

一、　定井（恒久的取水口）一ヶ所　　長さ３間、幅４間半、厚さ１尺２寸

一、　西浅井川落口水筒（地下埋設水路）一ヶ所　　長さ５間、幅９尺、高さ４尺

一、　西淺井川新堀（水路の新たな掘削）　　長さ１００間、川底９尺

工事のための労力は井筋組（用水路組合）の村人が提供する。工事の諸費用は役所が負担する。ただし、水筒の材料調達費については大赤見村と馬見塚村が負担する。』

かって、尾張の北西部には、丹羽郡（西成村を含む）・中島郡（一宮村を含む）・葉栗郡（佐千原村、淺井村を含む）の３つが存在した。丹羽にこの３郡の交点がある。

西成連区の母体となった「西成村」の名前の由来は、「丹羽郡の西端に成った村」ということだそうである。一般に地域の境界となるものは河川か道路であると思われるが、西成村の境界を設定するとき、大江川や大赤見用水とのかかわりはどのように考えられたのであろうか。